

アラカルト

富士山
あれや
これや

なぜ「富士山」というの？ ～名前の由来～

記録で最初に登場するのは奈良時代の『常陸国風土記』で「福慈」と書かれています。『万葉集』では「不尽山」「不土能高嶺」「布二能嶺」と出てきます。また、『竹取物語』では、帝がかぐや姫から授けられた不老不死の薬を駿河国にある日本で一番高い山の山頂で焼くよう家臣に命じる、という描写があり、「以来、その山のことをふじの山と呼ぶようになった」となっています。これは「不二」（並ぶもの無い）という意味です。

現在一般に使われる「富士」は平安時代初期の『続日本紀』に初めて登場し、その後、鎌倉時代以降、「土が富む」として武士好みの表記であったことから一般化したようです。

富士山の雲で天気予報？

富士山麓に住む人々は富士山にかかる雲の様子で天気を予想し、生活のなかで役立ててきました。よく知られているのが「笠雲」です。「富士山に笠がかかると雨」は富士山麓一帯で言われているようです。同じ「笠雲」も「離れ笠」だと晴れるようです。

海をはさんだ沼津市南部でも、富士山の雲で天気予報をしていました。「お山にかんぬきヤナライのもと」（＝富士山中腹に細長い帯雲がかかると東風が吹く。沼津市内浦地区）などが言い伝えられています。同様の言い伝えは、富士市田子浦地区でも残っています。

これらは単なる言い伝えではなく、実際、河口湖湖測候所が昭和8年から27年までの20年間、富士山の雲形を観測・分類し、その予報精度の高さが証明されています。

縁起のいい「富士山」

「一富士 二鷹 三茄子」とは縁起のよい夢を順に並べていう語。特に新年の初夢でこれらを見ると縁起が良いとされています。駿河国のことわざで、一説に駿河の名物をいうとされています。（『広辞苑』より）

富士山に登った人たち

初めて登ったとされているのは、伝説では聖徳太子とされています。『聖徳太子伝暦』（917年、藤原兼輔）では、27歳のときに、甲斐国の黒駒（馬）に乗って、浮き雲とともに消え、ひとつ飛びで富士山頂に達したとされています。

女性で初めて登ったのは、記録に残っている中では「高山たつ」です。天保3年（1832）9月、男の鬘を結び、男装して吉田口から登頂したとされています。このときの富士山は女人禁制の山でした。富士山に誰でも登れるようになったのは明治5年（1872）からです。

富士山に登った回数では、修験道の開祖とされる役小角が、伊豆に流刑されていた間、毎晩富士山に登って修行したという伝説があります。その他、平安時代に山頂に大日寺を建てた末代上人が数百回、富士講の開祖となった角行（戦国時代）が128回、江戸時代中期に活躍した食行身縁は45回、富士山に登ったと伝わっています。

登山者の荷を背負い、案内する「強力」であった梶房吉さんは50年間で1672回登ったそうです。単純計算で年間33回、富士山の登山シーズンを7～8月の2カ月だけとすれば、2日に1回ぐらいのペースで登頂していたこととなります。

編集・発行 富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会

わがまちからの富士山
三市対抗富士自慢

2010.7.17 ●富士市立博物館 富士市伝法66-2 広見公園内 TEL 0545-21-3380
●沼津市明治史料館 沼津市西熊堂372-1 TEL 055-923-3335
●三島市郷土資料館 三島市一番町19-3 楽寿園内 TEL 055-971-8228

第14回 富士・沼津・三島 3市博物館共同企画展

わがまちからの 富士山



ふじ



ぬまつ



みしま

はじめに

私もども富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会は、平成9年に第1回共同企画展「目いっぱい！腹いっぱい！東海道」を開催してから今回の企画展で14回を数えます。この間3市を結ぶ東海道をテーマの中心に据え、民俗や歴史に関する共同企画展を開催してきました。

このような中で、今回は私たちの身近な「富士山」

を取り上げます。ご存知のとおり富士、沼津、三島3市の生活は、富士山に見守られながら営まれてきました。しかし地元以外の地域から見た富士山の姿は意外に知られていません。今回は「わがまちからの富士山」と題し、版画や絵画、写真、文学作品など、富士山と関わりのある作品や資料を中心に、各地域から見た富士山を紹介します。

富士市立博物館

富士市伝法 66-2 広見公園内
TEL 0545-21-3380

平成22年10月9日(土)
～12月12日(日)

沼津市明治史料館

沼津市西熊堂 372-1
TEL 055-923-3335

平成22年7月17日(土)
～9月26日(日)

三島市郷土資料館

三島市一番町 19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228

平成22年12月19日(日)
～平成23年2月27日(日)

三島の富士山自慢

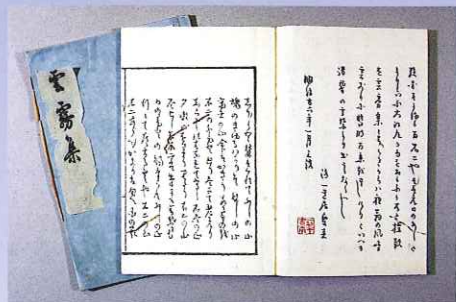
三島から望む富士山は北西に位置し、ちょうど宝永噴火口を正面に見ることができます。三島の北部は広く富士山の溶岩（三島溶岩流）に覆われ、街中には富士山の雪融け水が湧水として流れており、昔から人々の生活を支えてきました。

三島から仰ぎ見る富士山の雄姿と街中を流れる清流は、多くの画家や文人などによって様々な形に表現されています。



三四呂人形「JAPAN」
野口三四郎
昭和初期（個人蔵）

三四呂人形は三島出身の人形作家・野口三四郎（1901-1937）が制作した張子人形。この作品は背景に富士山が描かれており、「フジヤマ」「芸者ガール」など外国から来た観光客向けに製作されたものではないかと考えられる。



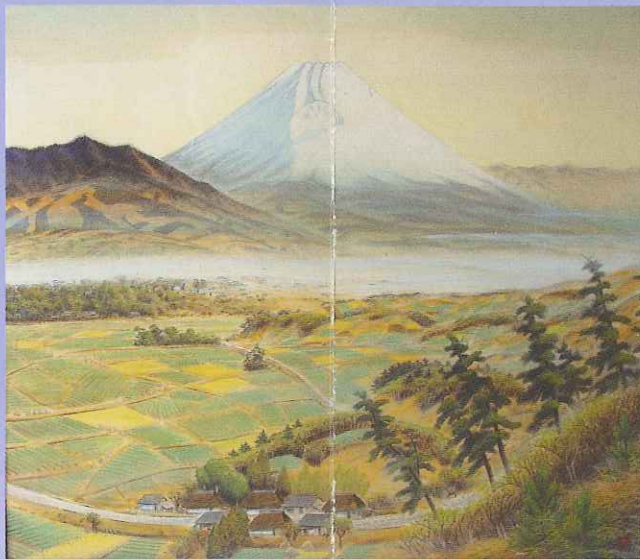
『雲霧集』滝の本連水
明治26年（1893）

滝の本連水（1832-1898）は江戸後期から明治にかけて活躍した俳人。本集には富士百景ともいべき富士を詠んだ秀句百句が収められている。



俳画「富士山」滝の本連水
（三島市立佐野小学校蔵）

「かへし来てしたしむ雪やふじの山」
本句は佐野小学校校歌の歌詞の一部となっている。



朝焼けの富士 下田舜堂

下田舜堂（1899-1989）は三島出身の日本画家。この作品は箱根西坂入口付近から富士山に向けて描かれたもの。三島市内が薄っすらと朝霧に包まれている。



小浜丘の図 畔柳对水 明治23年（1890）

明治時代に描かれた小浜池とその周辺風景。現在の三島駅前や楽寿園付近にあたる。北西に富士を仰ぎながら、豊富な湧水、富士山溶岩塚などが見られる。



東海道十二
五拾三次之内 三嶋
（有田屋版）
初代歌川広重



東海道十二
五十三次之内 三嶋
（葛屋版）
初代歌川広重



三島民謡「農兵節」（白滝公園内の石碑）

昭和初期に平井源太郎が韮山の農兵訓練にあやかり、ノーエ節を農兵節として唄と踊りをつけて全国に広めた。

「富士の白雪ノーエ 富士の白雪ノーエ 富士のサイサイ 白雪朝日とてける とけて流れてノーエ とけて流れてノーエ とけてサイサイ 流れて三島にそぐ」という歌詞には、三島を流れる富士の豊富な湧水が込められている。

富士山南麓に位置する富士市は、豊富な湧水に恵まれ製紙業のまちとして発展してきました。裾野を広げた雄大な富士山は、田子浦や富士川、浮島沼の景観と共に多くの浮世絵や絵画に描かれています。庶民の旅や富士登山が一般的になった江戸時代には、富士の白酒や左富士、鶴芝などの名物名所が描かれた富士山絵図も多く刊行されました。

富士の富士山自慢



富士山立体絵図 江戸時代



四季加嶋風俗図 英派(英一艇) 江戸中期

富士川渡船、富士の白酒店、實相寺の仁王門など富士山南麓の景観が描かれている。



元吉原の朝 川瀬巴水 昭和15年(1940)



富士浮島沼図 神戸蘆山 江戸後期

作者は幕末期に「鹿原三山」と称されたうちの一人で富士図を得意とした。



東海道五拾三次之内 吉原(左富士) 初代歌川広重 天保4~5年(1833~34)

吉原宿の移転で東海道の道筋が内陸へ大きく迂回したことにより生まれた名勝地。



駿州吉原宿絵図 吉野保五郎 文政10年(1827)

名物や名所旧跡のほか、吉原宿から表口や身延山等へ至る距離が記されている。



百人一首之内 山邊赤人 歌川国芳 寛政9年(1797)



「宝永山出現其二」『富嶽百景初編』 葛飾北斎 明治8年(1875)版

宝永山を珍しげに眺める旅人たちの中に右側に瘤のある人物が登場し、隆起した宝永山と見比べられている場面が描かれる。



ふじ川上り舟 高橋弘明 明治42年(1909)~大正12年(1923)

江戸時代初期から始まった「下げ米」「上げ塩」で有名な富士川舟運。上り舟は、船先につないだ綱を船頭が川岸で曳いて下流の岩淵から上流の甲州三河岸(鯉沢・青柳・黒沢)まで4日ほどかけて塩などを運んだ。



書画五拾三驛 駿河吉原 竹取ノ古事 林静ほか 明治5年(1872)



竹採塚(富士市比奈:竹取公園内)

富士市比奈には、かぐや姫が富士山頂に身を隠し、富士山の祭神となるかぐや姫伝説が伝わっている。

かぐや姫伝説

沼津の富士山自慢

沼津市は、愛鷹山をはさんで富士山の南に位置しています。沼津宿と原宿から見る富士山は広重の五十三次シリーズなどで度々描かれ、特に原宿から見る富士山は画面からはみ出るほど雄大に描かれています。また、「海越しの富士山」は沼津ならではの風景です。市内から見える様々な富士山は数多くの画家、文人たちに題材を提供しました。



勇ましい漁師 1939年
ポール・ジャクレ

作者は、戦前から戦後にかけて日本で活躍したフランス人版画家で「最後の浮世絵師」とも呼ばれた。幼少時代、父が沼津市内浦地区に別荘を求めようとしたことが契機となり、大正から昭和戦前期にかけて度々滞在した。

狩野川と富士 定方塊石 昭和初期

塊石は、明治15年(1882)岡山県生まれの版画家(没年未詳)。生涯で3回号を変え、それぞれ富士山を題材とした作品が残っている。



御浜海水冷温浴場保養館開業広告
明治25年(1892)4月



千本松原と富士 藤井達吉 昭和31年(個人蔵)
藤井達吉は、大正から昭和初期にかけての日本の工芸の近代化に多大な役割を果たし「近代工芸の先駆者」と呼ばれている。沼津には昭和31年(1956)に8ヶ月程寓居していた。千本松原と駿河湾越しの富士山を愛し、散歩に出かけてはスケッチをしていた。



富士山 水野忠友(沼津藩初代藩主) 江戸時代



東海道十三 五拾三次之内 沼津(有田屋版)
初代歌川広重画 江戸時代



東海道十四 五拾三次之内 原(有田屋版)
初代歌川広重 江戸時代

海見たとみきり香身の山の水
小松が原の富士のよく見ゆぬ水



風・伊豆長浜 昭和12年(1937)
笠松紫浪



「富士を背景とせる沼津三島」吉田初三郎画 昭和初期

吉田初三郎は、大正末期から昭和戦前期にかけて、全国各地の観光パンフレットの原画を描いた。主題を中心にとらえて、左右を極端にデフォルメした鳥瞰図を得意とし、「大正の広重」の異名をとった。

若山牧水詠歌
(沼津市若山牧水記念館所蔵)
牧水が沼津に居を定めた後、初めて詠んだ歌のひとつ。